

「あんだ、この店にはよく来るのか？」
 「あー大将の気に入りの店だからな、まあご一緒することは多いな」
 「あんたの本丸はもしかして南の方なのか？」
 「わざわざ訊くつてことはお前さんの本丸は北の方かい？」
 初めて出会った薬研と薬研であつたが話は弾んだ。

北は急に書くなつたり寒くなつたりで大変だとか、大将が海に行きたいと騒いでるとかうちの北丸もそうだとか、この薬研の精を出すやつらはどうしたらいいんだろつたとか。
 「同じ薬研藤四郎なら嫌がる気持ちもわかるが、日傘は悪くねえぞ」
 南の薬研はちらりと自身の黒い日傘を北の薬研に見せてやつた。

「俺たちの黒い頭は日差しを吸うからな。日傘が嫌ならせめて帽子被れ」
 「日傘を使う薬研藤四郎とはなかなか珍しいな」

大将から下賜されたら使わんわけにはいかんだろつ、と南の薬研は笑い、だが恥ずかしくないわけじゃねえんだ、と言つてにんまり笑つた。
 「一振りでも日傘を使う薬研藤四郎を増やしたくてなあ」
 「つはは、他当たつてくれ」
 そうか、と南の薬研は、けれどわかりきつていたようにおとなしく引き下がり話を変えた。
 「この店はレモンシロップも売つてるんだが、金子に余給があるなら勧めとくぞ」
 炭酸で飲めばこのレモンスカツシユができる、と南の薬研は言つて、そこで立ち上がった。
 「俺はまだ買い物があるから失礼するぜ。熱中症には気を付けろよ」
 北の薬研は軽く手をあげて感じ、南の薬研は会計を済ませて店の外に出た。ぱつと黒い傘が咲く。確かにあの日影があるのはいいのかもしれない、と北の薬研は思つたがやはり少々恥ずかしく思つた。
 「俺も面白い物を買ませるか」
 会計時にレモンシロップもひと瓶、買い求めたのだつた。

おしまい

隣の薬研にお冷を持つてきた給仕に、その薬研はすぐレモンスカツシユを注文した。暑いのが苦手な薬研もその給仕を呼び止めて同じくレモンスカツシユを注文する。
 「甘すぎさつぱりして、なおかつ量が多い」
 コスパ良つてやつだな、と隣の薬研は気持ちよく笑つたので、ほう、と暑いのが苦手な薬研も、楽しんでみだ、と返した。

「よおお。お前さん、暑いのは苦手か」
 声に顔を上げればそこには別本丸の薬研藤四郎がいて、失礼するぜ、と隣の席に座つた。来店しただばかりだというのに涼しい顔をして、本丸によつて個体差があるのだと知れる。
 「なんだ、決まらんのか。俺はこここのレモンスカツシユが好きだぜ」

出されたお冷で涼みながら薬研は卓のメニューを見る。高い。そしてどれも洒落ている。乱あたりにバシたらからかわれるだろつな、などと考えていた。
 「お前さん、暑いのは苦手か」

「暑い……」
 万屋街へ薬草の調達に来ていた薬研藤四郎はソファに沈み込むなりそつづがやいた。
 その喫茶店は万屋街の一番栄えたところにあつて、普段から混みあつていり少々お高い。普段なら薬研が立ち寄るような店ではないのだが、背中に腹は代えられない。薬研は暑いのが苦手だつた。店内はいい塩梅で冷房が効いている。

北の薬研と南の薬研

刀剣乱舞二次創作小説

こんにちは、ごおりです。
 暑いんですね！ 梅雨入りしたのにもう明けたんなんです？
 以前、冬場に北の明石さんと南の明石さんのお話を書いたのですが、今度は北の薬研さんと南の薬研さんのお話を書いてみました。
 QRコードは匿名感想アンケートフォームですので、よかつたら感想をくださいませ！
 ではでは、熱中症に気を付けましょう。水分補給は怠らず！



発行
 2022.06.26
 佐藤ごおり
 @ice13g